

交野市

上 の 山 遺 跡 I

一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇五年十二月

財団法人
大阪府文化財センター

2005年12月

財団法人 大阪府文化財センター

交野市

上の山遺跡 I

一般国道168号(都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線)道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

上の山遺跡は、大阪府の東北部、北河内に位置した枚方市と交野市にまたがって所在し、生駒山地から派生した枚方丘陵東端部の段丘面と、これを侵食して形成された開析谷、天井川沿微高地、氾濫原などの変化に富んだ地形に立地しています。また、遺跡の中央を東高野街道が南北に通過し、東側には天野川が磐船峡谷から淀川に向かって流れ、西側には谷を挟んで茄子作遺跡がひろがっています。

こうした、地理的・歴史的環境を持つ本遺跡では、平成15年度から行われた第二京阪道路建設予定地内の発掘調査において、旧石器時代から中世に及ぶ様々な種類の遺構と遺物を検出しております。とりわけ弥生時代中期の独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物や古墳時代前期の竪穴住居群、平安時代の水田跡が検出されたことは記憶に新しいところです。

さて、今回実施しました一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）道路整備事業に係る発掘調査では、弥生時代中期の土坑をはじめとして、古墳時代前期の竪穴住居群、計画的な配置をもつ古代の掘立柱建物群と構列などが発見されました。古代に属する掘立柱建物群は本遺跡では初めて検出されたものです。

なお調査地は、東に淀川と合流する天野川を臨み、西に河内平野への玄関口となる東高野街道に面した水陸交通の要所に位置することから、古代の掘立柱建物群はそうした交通路と関連づけられる遺構と考えられます。

このように今回の発掘調査によって、多彩な内容をもった上の山遺跡の一端を明らかにすることができました。今後も遺跡の発掘調査が継続されることによって、上の山遺跡の全貌が解明されていくことが期待されます。

最後になりましたが、調査にあたり、多大なご協力を賜った大阪府枚方土木事務所、大阪府教育委員会、また地元の皆様に深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財調査に一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2005年12月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）道路整備事業に伴って実施した上の山遺跡の発掘調査報告書である。調査地は大阪府交野市私部西5丁目地先に所在する。
2. 本調査は、大阪府枚方土木事務所から財団法人大阪府文化財センターが「一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）道路整備事業に係る上の山遺跡発掘調査」として、平成16年10月1日～平成17年2月28日の間委託を受け、現地調査は平成16年10月13日～平成17年1月31日の間、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと実施し、現地調査終了後引き続き平成17年2月28日まで整理作業及び報告書作成作業を実施した。
3. 発掘調査および整理作業は以下の体制で実施した。
調査部長 玉井 功、京阪調査事務所長 渡邊昌宏、主査 上野貞子〔写真〕、調査第四係長 三宅正浩、技師 南出俊彦、後藤信義、専門調査員 矢倉嘉人、調整課長 赤木克視、調整係長 森屋直樹、主査 山上 弘、技師 信田真美世
本書作成に係る整理作業は上記の職員の他に、技師 小松武彦、非常勤職員 館 邦典の協力を得た。本書の編集は矢倉が行った。本書の執筆分担は次に記す通りである。
第1章 三宅、第2章第1節 南出、第2節 矢倉、第3章 矢倉、第4章 館、まとめ 矢倉
4. 発掘調査の実施、遺物整理、報告書の作成にあたっては、大阪府教育委員会、枚方市教育委員会、財団法人枚方市文化財研究調査会、交野市教育委員会、私部区自治会、交野グリーンマンション管理組合の他に、下記の方々からご指導とご協力を賜った。
福江田佳男（文化庁記念物課）、橋本高明（大阪府教育委員会文化財保護課）、宇治田和生・桑原武志・西田敏秀（財団法人枚方市文化財研究調査会）、奥野和夫・真鍋成史・小川暢子・上田 修（交野市教育委員会）、野島 稔・村上 始（四條畷市教育委員会）、濱田延充（寝屋川市教育委員会）、小森俊寛（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）
5. 本調査で出土した遺物、および写真・図面類は、財団法人大阪府文化財センターで保管している。

凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海水位（T.P.）からのプラス値である。
2. 本書で使用している座標は、世界測地系によって測量し、国土座標第Ⅵ座標系で示している。
3. 遺構実測図に付した方位はすべて座標北を示している。なお、座標北は磁北より東へ6°40′、真北より西へ0°11′振れている。
4. 現地調査および遺物整理は「遺跡調査基本マニュアル」2003に準拠して行った。
5. 本書で使用した土壌色は、小山正忠・竹原秀雄編「新版標準土色帖」2002年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6. 遺構番号は種類に関係なく検出順に付与し、種類の前に番号を表記した。ただし、複数の遺構からなるまとまりのある遺構は、遺構種類＋同種遺構番号（例：掘立柱建物1）で表している。

目 次

第1章 調査に至る経緯と調査方法	1
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査成果	8
第1節 基本層序	8
第2節 遺構	12
第3節 遺物	21
第4章 自然科学分析	25
第1節 地山及び風倒木痕の検討	25
第2節 第15層の検討	28
まとめ	30

挿 図 目 次

図1 調査地点位置図	1
図2 調査区位置図	2
図3 地区割図	3
図4 周辺地形分類図	4
図5 周辺遺跡分布図	6
図6 北壁・東壁土層断面図	9・10
図7 遺構平面図	11
図8 137土坑平面・断面図	12
図9 86ピット、132ピット、245柱穴・246柱穴平面・断面図	14
図10 竪穴住居1-1、1-2平面・断面図	15
図11 竪穴住居2平面・断面図	16
図12 掘立柱建物1平面・断面図	16
図13 掘立柱建物2平面・断面図	17
図14 掘立柱建物3平面・断面図	18
図15 欄列1、柱穴列1平面・断面図	19
図16 ピット群平面・断面図	20
図17 出土遺物実測図(石器)	21
図18 出土遺物実測図(土器)	22
図19 土壌サンプル採集地点位置図	25

図20 土壌サンプル採集A地点断面図	25
図21 珪藻化石・植物珪酸体写真	29

表 目 次

表1 土器観察表	24
表2 A地点土壌成分表	26
表3 A地点地山の砂粒度	26
表4 B・C地点地山の砂粒度	27
表5 B・C地点粘土・砂粒占有率	27
表6 地山サンプルの因子分析変量プロット	28

図 版 目 次

図版1 遺構	1. 調査区全景 (垂直写真)		
図版2 遺構	1. 調査区全景 (南から)	2. 遺構検出状況 (西から)	
図版3 遺構	1. 竪穴住居1 (西から)	2. 竪穴住居2 (南西から)	
図版4 遺構	1. 掘立柱建物2 (北から)	2. 掘立柱建物2 (西から)	
図版5 遺構	1. 掘立柱建物1 (西から)	2. 掘立柱建物3 (南から)	3. 欄列1 (東から)
図版6 遺構	1. 86ピット	2. 132ピット	3. 245・246柱穴
図版7 遺構	1. 竪穴住居1-1 27柱穴	2. 掘立柱建物1 8柱穴	3. 掘立柱建物2 46柱穴
	4. 掘立柱建物2 47柱穴	5. 柱穴列1 238柱穴	6. 欄列1 212柱穴
	7. 竪穴住居2 168柱穴	8. ピット群 125柱穴	
図版8 遺構	1. ピット群 31柱穴	2. ピット群 32柱穴	3. 137土坑
	4. 137土坑土器出土状況	5. 191土坑	6. 調査区北壁断面
	7. 調査区東壁断面		
図版9 遺物	1. 遺構・包含層出土土器		
図版10 遺物	1. 86ピット出土土師器	2. 86ピット出土黒色土器	

第1章 調査に至る経緯と調査方法

本調査は、大阪府枚方土木事務所が実施している一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）道路整備事業に係る発掘調査である。調査地は交野市私都西5丁目地に所在している。

上の山遺跡は、財団法人大阪府文化財センターが、平成12年度に国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所・日本道路公団枚方工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設予定地内において茄子作遺跡確認調査を実施し、発見した遺跡である。その後、当センターが、平成15・16年度に実施した第二京阪道路建設に伴う発掘調査（上の山遺跡03-1）では、旧石器から中世にいたる各時代の様々な遺構と遺物を検出している。

それらの調査成果に基づき、当該地は第二京阪道路建設予定地内（平成16年度発掘調査実施範囲）に接していることから、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、当センターが大阪府枚方土木事務所の委託を受け、平成16年度に発掘調査を実施し、引き続いて整理作業と報告書作成を行った。

本調査の調査名は上の山遺跡04-1とし、地区割り（財）大阪府文化財センターが定めた「遺跡調査基本マニュアル」（2003年8月）に基づき、世界測地系によって測量した国土座標第Ⅵ座標系を基準として遺物の取り上げや遺構実測図の作成を行った。地区割りは図3の通りである。

発掘調査は盛土と近代耕作土層を機械掘削で除去し、その後、人力による掘削を行った。また調査最終段階において、下層遺構確認のためトレンチを設定して掘り下げた。平面測量についてはトラックレーンによる空中写真測量を1回実施し、縮尺が1/50・1/100の平面図を作成した。また、掘立柱建物、土坑などの個別の遺構平面図および断面図については1/10・1/20の図面を随時作成した。

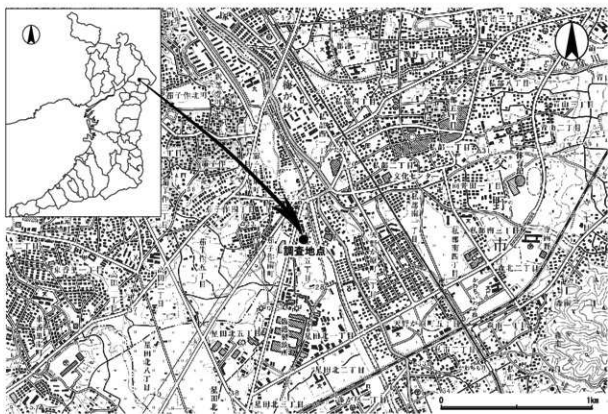


図1 調査地点位置図（1：25,000）

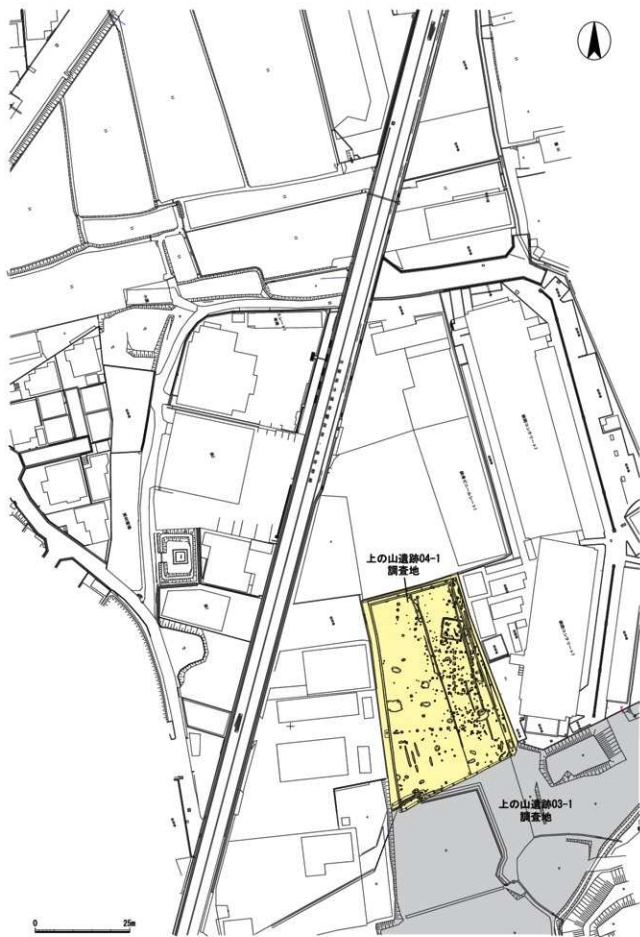


図2 調査区位置図 (1:1,000)

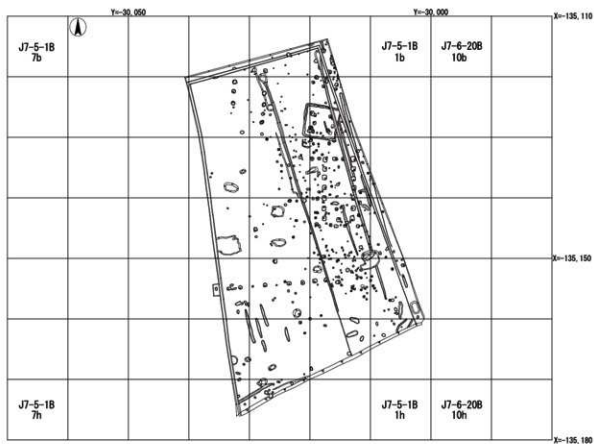
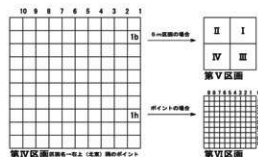
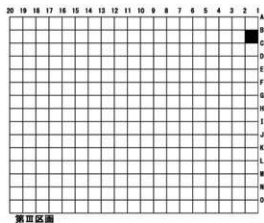
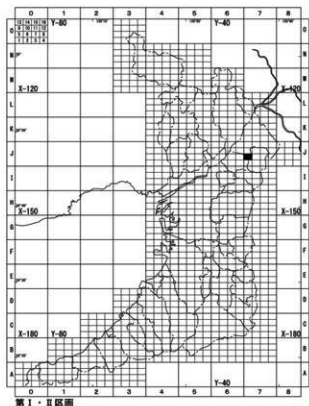


図 3 地区割図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

上の山遺跡は大阪府の東北部、北河内地域に位置する枚方市と交野市にまたがって広がり、磐船峡谷から淀川に向かって北西方向に流れる天野川の左岸、枚方丘陵の東端部に立地する。

まず、遺跡周辺の地形を巨視的に眺めると、大阪府と奈良県を隔てる生駒山地と、交野山地から派生した丘陵と段丘が、天野川によってほぼ東西に分けられていることがわかる。その左岸を枚方丘陵、右岸を交野丘陵と呼んでいる。枚方丘陵は標高50~30mで東へ緩やかに傾斜し、小さな谷が複雑に入り込んだ様相を呈する。また、交野丘陵は標高50~25mで南東から北西に向かって傾斜し、交野山地の谷筋から流れ出た小河川がみられる。

つぎに、天野川左岸の周辺地形を、遺跡の東側を限る天野川からみていくと、天井川沿微高地、氾濫原と続き、低位段丘・中位段丘とこれを侵食した開析谷・氾濫原が樹枝状にひろがり、段丘は西方の枚方丘陵へとつながっていることがわかる。本遺跡が立地する中位段丘頂部は標高29.7mを測り、「東高野街道」(1876年、近代的道路行政の開始以降に固定)がその段丘上を南北に通過している。その「街道」の東側が交野市域で、西側が枚方市域にあたる。東側では、中位段丘から低位段丘の変換点に段丘崖が形成されており、さらに低位段丘とそれに接した天野川の天井川沿微高地と続く。一方、西側では、中位段丘に接して開析谷・氾濫原が南北に走り、段丘斜面は崖状となる。また、北・南側は中位段丘がそれぞれ北・南方向に向かって緩やかに傾斜し、低位段丘へとつづいていく。

以上のことから、上の山遺跡は、中位段丘が独立丘陵状となる地形を中心にして広がり、調査地はその東端、天野川を臨む低位段丘の縁辺であることがうかがわれる。

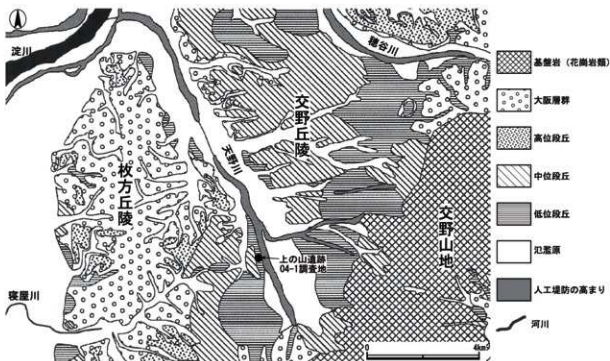


図4 周辺地形分類図

第2節 歴史的環境

上の山遺跡は、旧石器時代と縄文時代の遺物、弥生時代から中世にいたる遺構・遺物が出土・検出された複合遺跡である。今回の調査では、検出遺構の主体が飛鳥時代の掘立柱建物群であることから、以下では、古代を中心とした天野川流域をめぐる歴史的環境を記述することにしたい。

旧石器時代の遺跡は、天野川左岸の枚方丘陵に上の山遺跡が位置し、右岸の交野丘陵の縁辺に星丘遺跡・星丘西遺跡が分布する。

また、縄文時代については、上の山遺跡で滋賀里Ⅲb式、その西に隣接した茄子作遺跡では、前期と滋賀里Ⅲ式の土器片が出土している。しかし、両遺跡共に遺構は検出しておらず、実態は不明瞭と言わざるを得ない。

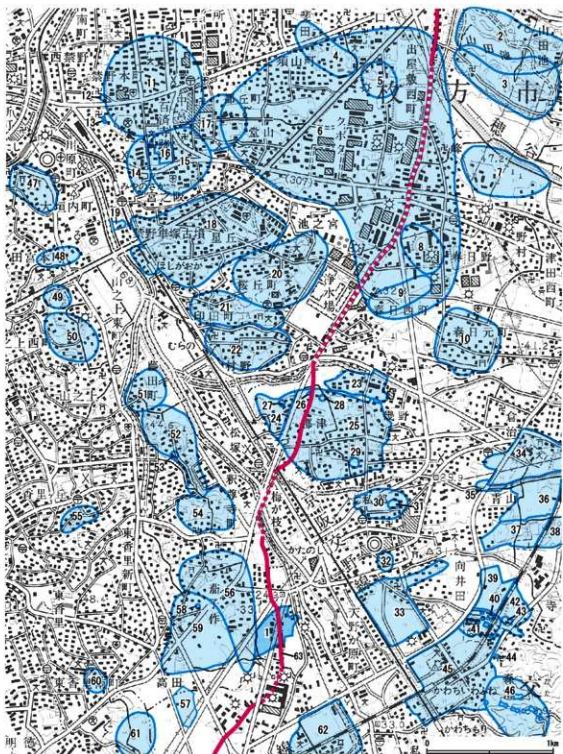
弥生時代には、天野川右岸の扇状地に立地した私部南遺跡で前期新段階の竪穴住居等を検出しており、天野川流域における弥生集落出現の一端が明らかとなった。中期になると遺跡の分布が密になっていく。上の山遺跡では中期前半の土器が大量に出土した土器溜りと、独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物群が検出されている。中期に始まり後期へと続く遺跡には、右岸に星丘西遺跡、左岸に藤田山遺跡が立地する。星丘西遺跡は竪穴住居や大溝の他に、方形周溝墓群や円形周溝墓群が検出されている。また、藤田山遺跡では、竪穴住居やV字状に掘られた溝を検出している。つづいて後期に成立する遺跡としては、星丘遺跡・村野南遺跡・茄子作遺跡・森遺跡などがある。

古墳時代前期には天野川上流域右岸、交野山地から派生した丘陵尾根上に森古墳群が造営され、つづいて下流域の左岸に藤田山古墳と右岸に禁野車塚古墳、さらに中期になると前方後円墳を含む車塚古墳群が築造される。後期には、交野山地西麓に倉古墳群・寺古墳群などの群集墳が分布する。なお、上の山遺跡の近辺では、大将軍塚古墳などがかつて存在していたようであるが、削平されて詳細は不明である。

集落では、弥生時代後期から中期までつづく茄子作遺跡が西接して位置し、中期には右岸段丘上に星丘西遺跡・村野遺跡、左岸段丘上に藤田山遺跡などが分布する。なかでも星丘西遺跡では中期から後期にかけての方形周溝墓や円形周溝墓が検出されている。また、後期に成立する遺跡としては、星丘遺跡・村野南遺跡などがある。星丘遺跡では身舎の南半分に「外周柱穴列」を配した掘立柱建物群がみついている。また、左岸に立地する藤田町遺跡では古墳時代後期から飛鳥時代にかけての掘立柱建物、竪穴住居が検出されている。一方、交野山地から派生した丘陵につづく段丘には上私部遺跡、森遺跡が立地する。上私部遺跡では中・後期から飛鳥時代にかけて竪穴住居と掘立柱建物で構成された集落が営まれており、森遺跡では前期から後期まで集落が継続し、中・後期には鍛冶関連遺構・遺物も検出されている。

つぎに古代の主な遺跡を、天野川の下流域にまで目を向けてみると、百済寺遺跡・禁野本町遺跡・中宮尼寺田遺跡・村野南遺跡・茄子作遺跡・上の山遺跡・森遺跡・百済寺跡・中山観音寺跡などの諸遺跡をあげることができる。これらの遺跡は上の山遺跡・茄子作遺跡、中山観音寺跡を除けば、多くは天野川右岸の段丘に立地している。

古代律令制下、行政区画では上の山遺跡は河内国交野郡に属していた。交野郡は大宝2年(702年)頃に河内国茨田郡から分割されたと考えられており、郡衙の所在地は歴史地理学的研究から、天野川右岸にあたる交野市郡津周辺に比定されている。交野郡衙跡ではこれまでの発掘調査において郡衙に関わ



- | | | | | | | |
|-------------|-------------|-----------|-----------|------------|------------|------------|
| 1 上の山遺跡 | 10 春日環濠集落遺跡 | 19 熊野草塚古墳 | 28 郡津櫓塚 | 37 上私部遺跡 | 46 森古墳群 | 55 中山観音寺遺跡 |
| 2 山田池築跡群 | 11 熊野本町遺跡 | 20 星丘遺跡 | 29 熊長堂寺 | 38 神宮寺遺跡 | 47 岡東遺跡 | 56 菟子作遺跡 |
| 3 出屋敷遺跡 | 12 白地塚古墳 | 21 村野遺跡 | 30 私部城遺跡 | 39 今井遺跡 | 48 田宮遺跡 | 57 平池遺跡 |
| 4 甲斐田新町遺跡 | 13 旗野上野古墳 | 22 村野南遺跡 | 31 私部城跡 | 40 交野東草塚古墳 | 49 山之上天堂遺跡 | 58 大將軍塚古墳 |
| 5 出屋敷西遺跡 | 14 中宮ドンパ遺跡 | 23 郡津洗り遺跡 | 32 でがしろ遺跡 | 41 草塚古墳群 | 50 山之上遺跡 | 59 菟子作下浦遺跡 |
| 6 中宮・池之宮古墳群 | 15 百濟寺遺跡 | 24 ハセヅ遺跡 | 33 私部南遺跡 | 42 寺村遺跡 | 51 藤田町遺跡 | 60 東春日南遺跡 |
| 7 野遺跡 | 16 百濟寺跡 | 25 交野都術跡 | 34 倉治遺跡 | 43 大畑古墳 | 52 藤田山遺跡 | 61 寝屋東遺跡 |
| 8 春日北野遺跡 | 17 中宮尼寺田遺跡 | 26 郡津大塚 | 35 焼垣内遺跡 | 44 須弥寺遺跡 | 53 藤田山古墳 | 62 坊屋遺跡 |
| 9 春日北川遺跡 | 18 星丘西遺跡 | 27 郡津丸山古墳 | 36 有池遺跡 | 45 森遺跡 | 54 藤田土井山遺跡 | 63 東高野街道 |

図5 周辺遺跡分布図 (1 : 30,000)

る明確な遺構は確認されていないが、この地域に郡衙が存在していた可能性は高い。また、交野郡衙跡の北西、天野川支流の北川を挟んで対岸に位置する村野南遺跡では、飛鳥時代から奈良時代前半にかけて規則的に配置された掘立柱建物群がみつかり、交野郡衙との関わりが指摘されている。交野郡衙跡の北側に位置する郡津決り遺跡でも時期は判然としませんが、大型の柱穴をもつ掘立柱建物が出されている。

天野川下流域右岸、交野丘陵の縁辺部に百済寺跡が位置する。百済寺は二塔一金堂形式の伽藍配置を取る古代寺院で、百済王氏により8世紀後半に創建されたとされる。百済王氏は百済王の末裔で、元は難波の地を本貫地としていたが、天平勝宝年間(749～757年)に敬福が河内守に任ぜられ、当地へ本貫地を移したとされ、百済寺の創建もこの頃と考えられる。出土する瓦もこの時期に相当する。百済寺跡を含む百済寺遺跡では飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物が出されている。百済寺跡に北接する禁野本町遺跡と、東接する中宮尼寺田遺跡において、奈良時代から平安時代の掘立柱建物を中心とした遺構が多く検出されている。これらの遺跡は百済寺の造営氏族である百済王氏の居住域と想定されている。また、百済寺遺跡では飛鳥時代後期の瓦が出土することから百済寺造営以前に寺院が存在したことが考えられる。中山観音寺跡は枚方丘陵の斜面に位置する古代寺院で、基壇や塔心礎などの遺構が検出されており、出土する瓦は白鳳時代から奈良時代に属する。

調査地とはやや離れるが、交野郡内に所在する船橋遺跡、九頭神遺跡、招提中町遺跡の諸遺跡で古代の建物が出されている。船橋遺跡は淀川に面した低位段丘上に立地しており、主軸をそろえ、整然と配置された奈良時代前半の掘立柱建物群や長岡京期の大溝が検出されている。九頭神遺跡は穂谷川右岸の交野台地上に立地し、古墳時代後半から飛鳥時代前半の堅穴住居及び掘立柱建物で構成される集落と、奈良時代から平安時代の掘立柱建物群が検出されている。また、遺跡内には飛鳥時代後半に創建されたと考えられる九頭神廃寺が位置する。招提中町遺跡は穂谷川右岸の中段段丘上に位置し、古墳時代から飛鳥時代後期の堅穴住居群や平安時代前期の掘立柱建物群が検出されており、掘立柱建物群のなかに廂を持つ大型の建物が存在する。また、瓦や墨書土器が出土していることから、一部瓦葺きの建物があったことや官衙的性格を備えていたことが想定されている。

ところで、平安時代の初め、桓武天皇と嵯峨天皇は交野の地への行幸・遊覧を頻繁に行っていたことが『続日本記』や『類聚国史』などに記されている。延暦4年(785年)、桓武天皇は交野柏原の野に郊祀壇を造り、そこで中国にならった祭りを行ったとされる。この郊祀壇の場所は枚方市片鉾の地とされるが、最近の発掘調査成果では、禁野本町遺跡で平安時代の方形区画遺構が検出されており、郊祀壇との関連が指摘されている。

一方、上の山遺跡の周辺では、西接した茄子作遺跡で奈良時代の掘立柱建物が、また天野川を挟んで東方に位置した森遺跡からは平安時代の掘立柱建物や溝などが検出されている。

なお、調査区の西方約50mの地点を東高野街道が南北に通っている。東高野街道は上の山遺跡付近では中段段丘上を縦断するが、遺跡の北方の地形が低位段丘となっており、段丘崖上に沿うように天野川に向かって北方へ延びている。東高野街道は、平安時代に都の天皇・貴族を中心に盛んとなる高野山参詣を目的とした街道の一つであるとされ、その道筋は南海道を踏襲していたといわれる。しかし、実際には天皇や貴族の参詣にはあまり使われていなかったようで、東高野街道の名称も武士や民衆の間にも信仰が広がった中世後半から近世以降に成立したと考えられる。河内国の中央部には低湿地が広がっており、国内において主要な南北道であったこの道の重要性は高かったものと考えられる。

第3章 調査成果

第1節 基本層序

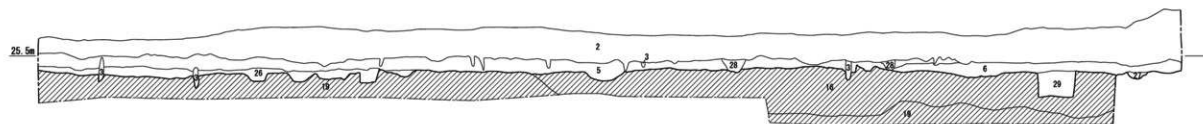
調査地は中位段丘から低位段丘にいたる斜面に位置し、西から東に向かって傾斜するが、現況では後世に削平を受けて平坦面を形成する。西側の中位段丘は、段丘上を南北に府道枚方富田林泉佐野線が縦断しており、この道路に伴う開発によって周辺は大きく削平を受けている。

土層の堆積状況は主に、調査区北壁、東壁の観察を通じて行った。調査区東南部において第1層の現代盛土がみられたほかは、第2層の現代耕作土が現地表面となる。現地表面の標高は25.8mである。第2層の下には、第4層から第10層、第26層の耕作土層を数層確認しており、北東側では、これらの耕作土層に伴う杭の痕跡を多数確認した。断面観察から杭の痕跡は第4層あるいは、第5層から掘り込まれたものである。また、これらの層からは弥生時代から近世にいたる遺物が出土している。

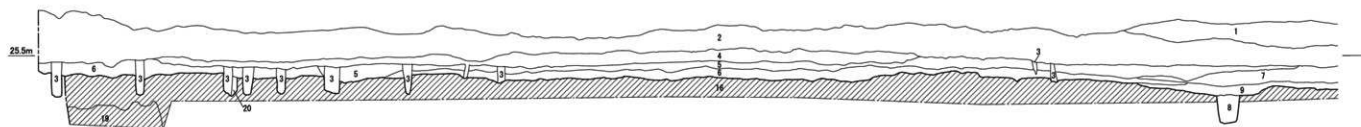
調査区南東部では、他とは堆積の状況が異なっており、第2層現代耕作土の下には、明黄褐色の地山を用いた第11層の整地土層があり、その下には、第13層の洪水による黄橙色砂層の堆積が認められた。洪水砂層は調査区東壁南端から12m付近で途切れ、第11層の整地土層は13m付近で第7層の耕作土により削平を受けていた。この整地土は、洪水によって砂で覆われた耕作地を復旧するために段丘縁辺を削って、整地土として用いたと考えられる。洪水砂層下にある第14層は、鉄分が水平に沈着した褐色層であり、第14層の下には南側のみ第15層の耕作土が堆積する。この第15層では土壌分析を行った（詳細は第4章第2節参照）。遺構面は上記の土層を除去し、標高25.3mで第16層と第19層のほぼ平坦な地山面で検出したが、南東へ向かって低く傾斜しており、南東部(1B1f、1B1g)のみ標高25.0mで検出した。

地山は調査区北側中央部から南西部にかけては第19層の明黄褐色シルトが主となり、東側では、第16層の礫混じり褐色中砂が地山となる。第16層は人為的な堆積土の可能性もあったため、調査区内にトレンチを設定して下層確認のため掘削を行った。しかし、下層において遺構、遺物を確認することはできなかった。また、土壌分析の結果、この層は人為的な堆積ではなく、自然堆積層の可能性が高く、地山と判断した（第4章第1節参照）。また、第19層は大阪層群を構成すると考えられ、調査区北西部では標高25.3m、北東部は標高24.9mで確認しており、東に向かって傾斜し、東側では第19層の上に第16層が堆積する。南東部においては、第16層の下にはいずれも地山である第17層の褐色細礫混粗砂と、第18層の黄橙色細礫混粗砂が堆積していた。また、第16層と第19層の土層の変わり目は、調査区北端では1B3b、1B4bの境付近にみられ、そこから南に向かって延び、1B3eのほぼ中央を縦断し、調査区南端では1B2g、3gの境付近にいたる。

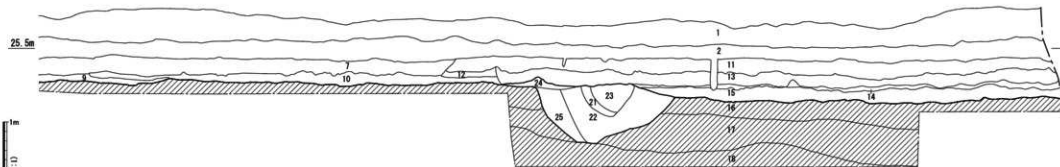
第16層を掘り下げた断面において、縦方向に幾筋にもはしる細い筋を確認した。幅は0.5～3cm程度で第16層から第18層の間で見られた。遺構面においても、南北方向に長く延びる細い筋を多数確認しており、これらは地割れの痕跡と考えられる。同じく第16層を掘り下げた断面において風倒木の痕跡を確認した。断面形はU字形を呈し、第16層と類似した埋土が数層に分れ堆積していた。風倒木痕は平面においても調査区南側を中心に複数確認しており、平面形は三日月形あるいは不整な楕円形を呈した特徴的な形で検出した（第4章第1節参照）。



北壁断面



東壁断面



東壁断面

- | | | | |
|--------------------------------|------------------------------|---------------------------------|----------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 10YR7/4 細粒じり中砂(遺土) | 9 灰白色 2.5YR7/1 細砂混じり中砂 | 17 褐色 10YR4/6 細砂混じり粘砂 | 25 褐色 7.5YR4/6 表層じり中砂(風腐木) |
| 2 黒褐色 10YR3/1 中砂混じり粘質細砂(現代耕作土) | 10 灰白色 2.5YR7/1 細砂混じり中砂 | 18 黄褐色 10YR7/8 細砂混じり粘砂 | 26 褐色 10YR4/4 粘質土 |
| 3 粘砂 | 11 明黄褐色 10YR6/8 中砂 | 19 明黄褐色 10YR6/8 シルト(地山) | 27 褐色 7.5YR6/6 細砂混じり粘質中砂 |
| 4 灰色 5YR4/1 粘砂 | 12 にぶい黄褐色 10YR6/4 細砂混じり中砂 | 20 明黄褐色 10YR6/8 細砂混じり中砂 | 28 灰色 5Y6/1 粘質中砂 |
| 5 褐色 7.5YR4/6 粘砂 | 13 にぶい黄褐色 10YR7/2 粘砂 | 21 褐色 10YR4/6 極細砂混じり粘質粘砂(風腐木) | 29 褐色 10YR4/6 粘質中砂 |
| 6 明黄褐色 10YR6/8 細砂混じり中砂 | 14 褐色 7.5YR4/2 中砂混じり粘砂(水分豊富) | 22 暗褐色 7.5YR3/4 極細砂混じり粘質中砂(風腐木) | |
| 7 明黄褐色 10YR6/8 細砂混じり中砂 | 15 暗灰色 10YR4/1 粘砂混じり中砂 | 23 褐色 7.5YR4/6 細砂混じり中砂(風腐木) | |
| 8 褐色 7.5YR4/4 細砂混じり中砂 | 16 褐色 7.5YR4/6 極細砂・粘砂混じり中砂 | 24 黄褐色 10YR5/6 極細砂混じり中砂(風腐木) | |

図6 北壁・東壁土層断面図

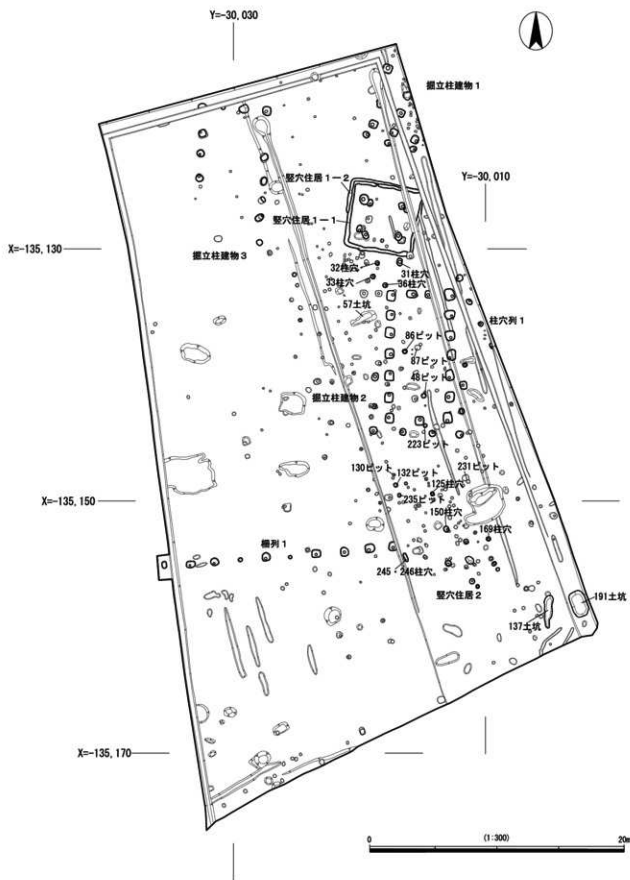


図7 遺構平面図

第2節 遺構

主な遺構として、弥生時代中期の土坑2基、古墳時代前期の竪穴住居1棟、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居2棟、掘立柱建物3棟、欄列1条、平安時代の柱穴列1条と土坑1基、ピットなどを検出した。

137土坑 (図8、図版8-3・4)

調査区南東端1B1fで検出した。平面形は南北に長い不整な楕円形で長辺2.6m、短辺0.6m、深さ0.15mを測る。底面の中央付近に凹凸が多くみられた。遺物は土坑中央部の底面近くで弥生土器壺の破片(図18-4・5)が出土した。類似した遺構に57土坑(図7)がある。

竪穴住居2 (図11、図版3-2、図版7-7)

調査区南東部1B1f、1B2fで検出した竪穴住居である。削平を受け残存状況は悪い。中央部で炉跡と考えられる炭の入った土坑と、主柱穴となる156・157・165・171柱穴を検出した。柱掘方の平面形は直径0.4~0.5mの円形で、断面形はU字形を呈し、深さは0.3~0.5mであった。すべての柱穴で0.1~0.2mの柱痕跡を確認した。また、165・171柱穴の南東側で、検出した主柱穴と同規模の168・172柱穴については、竪穴住居2に関わる可能性もある。主軸はN-39°-Eである。遺物は出土しなかった。

竪穴住居1-1 (図10、図版3-1、図版7-1)

調査区北東部1B2cで平面方形の竪穴住居を検出した。規模は長辺5.7m、短辺5.4mを測り、面積は約30.8㎡である。後世の削平により、残存状況は良好とはいえない。壁溝は全周し、幅0.25m、深さ5~8cmを測る。主柱穴としては21・27・251・253柱穴を検出した。柱掘方の平面形は隅丸方形もしくは円形を呈し、1辺ないし直径0.4~0.7m、深さは0.5mを測る。27柱穴で直径0.2mの柱痕跡を確認した。主軸はN-7°-Eである。遺物は出土しなかった。

竪穴住居1-2 (図10、図版3-1)

竪穴住居1-1の建替え後の竪穴住居である。削平により残存状況は悪い。壁溝は南辺・東辺ではまったく遺存しておらず、北辺と西辺側で検出したのみで、幅0.2~0.3m、深さ5cmを測る。主柱穴としては20・25・26・30柱穴を検出した。柱掘方の平面形は、直径ないし1辺が0.4~0.7mの円形あるいは方形を呈する。断面形は隅の丸い矩形あるいはU字形を呈し、深さ0.5~0.6mであった。20・30柱穴では直径0.2mの柱痕跡を確認した。なお、竪穴住居1-1と竪穴住居1-2の主柱穴と北辺の壁溝が重複関係にあり、位置関係から、竪穴住居1-2は、竪穴住居1-1とほぼ同規模で、北西に寄せて建てられている。

遺物は柱穴から弥生土器、土師器が出土したが、大半は細片で、図化できたのは26柱穴出土土師器壺(図18-6)だけである。

掘立柱建物1 (図12、図版5-1、図版7-2)

調査区北東部1B2b、1B2cで検出した総柱建物で、主軸方向はN-20°-Eである。北東側が調査区外へ広がるため建物規模は不明であるが、現状では桁行3間以上(4.6m)、梁行2間以上(3.7m)の建

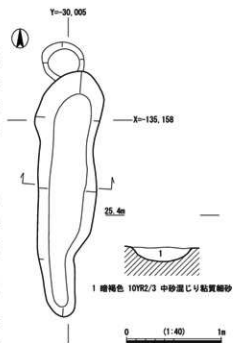


図8 137土坑平面・断面図

物となる。柱間寸法は、南側梁行の柱間で柱穴列東から2.0m、1.7mとなる。柱掘方平面形は1辺0.6～0.7mの隅丸方形を呈し、断面形は隅丸の矩形となり、深さは0.2～0.25mを測る。柱穴には直径0.1～0.25mの柱痕跡を確認できるものもあった。

また、南側梁行にはほぼ平行して3基の柱穴（9・10・11柱穴）を検出した。柱掘方平面形は直径0.5mの円形を呈し、断面形は隅の丸い矩形で穴底がほぼ平坦なものと、U字形を呈するものがあった。深さは0.2mを測る。すべての柱穴で直径0.1～0.2mの柱痕跡を確認した。中央の10柱穴が9・11柱穴より、やや南にずれて位置し、柱筋の通りがよくない。

遺物は柱穴から弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土した。9柱穴からは、須恵器の平瓶もしくは鉢底部片と推定される破片が出土した（図18-7）。

掘立柱建物2（図13、図版4、図版7-3・4）

調査区中央部東寄り1B2d、1B2eで検出した桁行6間、梁行は北側で3間、南側で2間の南北棟で、南半にのみ外周に身舎柱掘方より一回り小型の柱掘方をめぐらせている。主軸はN-2°-Eとやや東に偏る。

身舎の規模は桁行6間（東側桁行9.85m、西側桁行9.70m）、北側梁行で3間（4.65m）、南側梁行で2間（4.70m）、床面積は約45.7㎡である。柱間寸法は東側桁行で北から1.60m、1.70m、1.60m、1.55m、1.50m、1.90m、西側で北から1.60m、1.60m、1.60m、1.50m、1.65m、1.75mとなり、梁行では3間の北側で東より1.90m、1.15m、1.60m、南側が東より2.15m、2.55mとなる。柱掘方平面形は1辺0.65～0.9mの隅丸方形を呈し、断面形は隅の丸い矩形、あるいは扁平なU字形をなし、穴底は平坦に掘削される。深さは0.15～0.4mを測る。すべての柱穴から直径0.2～0.3mの柱痕跡を確認している。

建物の南半において身舎の柱筋と平行して配された柱穴列を、両桁行では2間分、梁行では3間分を検出した。桁行側では身舎柱筋から外側に約1.2m、梁行側では外側に約1.1mの位置で検出した。これらの柱間寸法は東側桁行側では、北より2.05m、1.90m、西側桁行側では、北より2.30m、1.90m、梁行側東から2.30m、2.45m、2.30mを測る。柱掘方平面形は直径0.3～0.6mの円形を呈する。断面形はU字形を呈するものが多く、深さは0.1～0.4mを測る。埋土中には、直径0.15～0.2mの柱痕跡が確認できるものが多い。この外周柱穴列は西側北端の60柱穴を除いて、身舎柱間のほぼ中間に対応する位置で検出した。また、身舎の柱穴と比較すると一回り小規模であり、廂あるいは縁にあたるものと考えられる。

遺物は各柱穴から須恵器、土師器などが出土したがいずれも細片である。

掘立柱建物3（図14、図版5-2）

調査区北西部1B3c、1B4cで検出した南北棟の掘立柱建物で、主軸はN-1°-Eである。大きく削平を受けているため確認できない柱穴もあり、現状では建物規模は桁行6間（推定10.4m）、梁行3間（推定5.1m）を想定している。柱間寸法は桁行推定1.5～2.0m、梁行北側で推定各1.7mとなる。床面積は約53㎡である。柱掘方平面形は円形ないし隅丸方形を呈し、大ききには差異がみられる。断面形はU字形から隅の丸い矩形を呈するものまで様々で、深さは5～10cmを測る。柱穴には直径0.1～0.15mの柱痕跡を確認できるものがあった。南東隅の柱穴の外側に102柱穴を検出しており、廂か縁がつく可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

横列1（図15、図版5-3、図版7-6）

調査区南西側、1B2f、1B3f、1B4fで直線に並ぶ10基の柱穴を検出した。主軸はN-85°-Eである。西側は大きく削平を受けており、残存状況は非常に悪く、柱痕跡しか検出できないものもあった。検出長は18mで、柱間寸法は1.9～2.2mを測る。柱掘方平面形は直径ないし1辺が0.5～0.7mの円形あるいは

隅丸方形を呈する。断面形は隅の丸い矩形を呈し、穴底がほぼ平坦になるものが多くみられた。深さは0.1~0.2mを測る。柱穴には直径0.15~0.25mの柱痕跡を確認できるものがあつた。櫛列は西側へ続く可能性が考えられるが、東側では検出されなかつた。遺物は、土師器の細片が出土しただけである。

柱穴1 (図15、図版7-5)

調査区中央部東寄り1B2dで検出した柱穴列で、主軸はN-27°-Wである。3間分の柱穴を検出した。柱穴は調査区外へ広がるため、検出長6mで、柱間寸法はそれぞれ2mを測る。掘方平面形は直径が0.4~0.5mの円形で、断面形はU字形を呈する。深さは検出できた柱穴の北と南の両端では0.5m前後で、中央の2基の柱穴では0.15m前後であつた。各柱穴では直径0.1~0.2mの柱痕跡を確認した。建物の一部にあたる可能性があるが、調査区外へ広がるために詳細は不明である。遺物は出土しなかつた。

191土坑 (図版8-5)

調査区南東端1B1fで検出した土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺2.0m、短辺1.2m、深さ0.5mを測る。断面は矩形を呈し底部は平坦であつた。遺物は底の近くから、11世紀後半に属する土師器皿(図18-8)が出土した。

86ピット (図9、図版6-1)

調査区中央部東寄り1B2dで検出したピットである。平面円形で直径約0.35mを測る。断面形はU字形で、深さは0.3mであつた。埋土中から土師器皿、椀(図18-17~24)と黒色土器A類椀(図18-25~34)の小破片が多数出土した。土師器皿、椀は口縁部34点が出土したがすべて破片で、完形になる個体はなかつた。黒色土器A類椀は口縁部片16点、底部片5点、その他に体部片も多数みられた。

132ピット (図9、図版6-2)

調査区南東部1B2eで検出したピットである。平面形は円形で直径約0.2mを測る。断面形は台形を呈し、底はほぼ平坦であつた。深さは0.1mを測る。遺物は黒色土器A類椀が底面近くで口縁部を上にし、壁面に立てかけられたような状態で出土した。この他にも別個体の黒色土器と土師器の小片が出土している。

245・246柱穴 (図9、図版6-3)

調査区南側1B2fで検出した柱穴である。1基の土坑として掘削したが、形状から布振り状に掘られた柱掘方と思われる。穴底からそれぞれ根石と考えられる石が出土した。245ピットでは上面がほぼ平坦で厚さ約2cmの石が据え置かれていた。246柱穴では丸みを帯びた拳大の石が据えられていた。

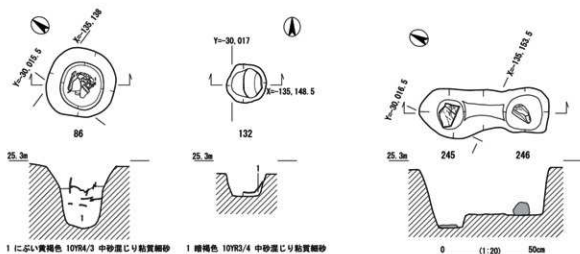
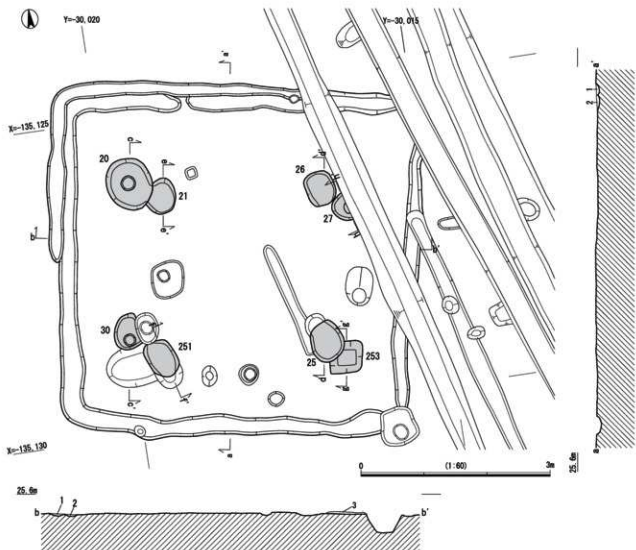


図9 86ピット、132ピット、245柱穴・246柱穴平面・断面図



南北(a-a')・東西(b-b')・断面

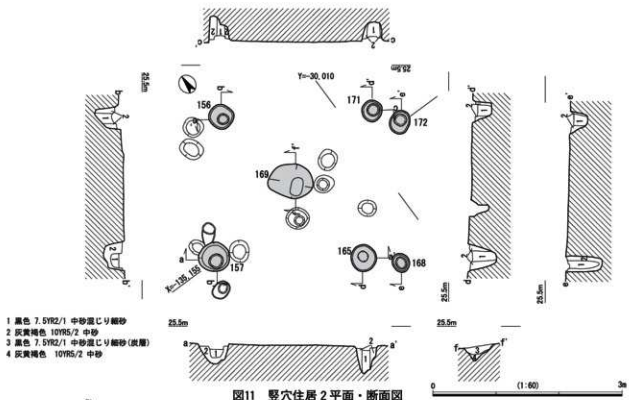
- 1 にふい責褐色 10YR4/3 粗砂・中砂混じり粘質細砂
 2 にふい責褐色 10YR5/4 粗砂・砂混じり細砂
 3 褐色 7.5YR4/4 粗砂混じり中砂



柱穴断面

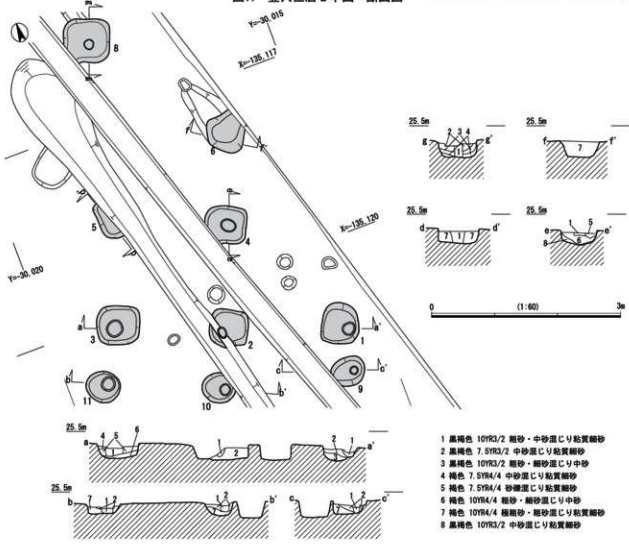
- 1 灰黄褐色 10YR4/2 中砂混じり粘質細砂
 2 褐色 7.5YR4/4 粘質粗砂
 3 黒褐色 7.5YR 中砂混じり粘質細砂
 4 褐色 10YR4/2 粘質細砂
 5 褐色 10YR4/4 中砂混じり粘質細砂
 6 灰褐色 7.5YR5/8 粗砂

図10 竪穴住居1-1、1-2平面・断面図



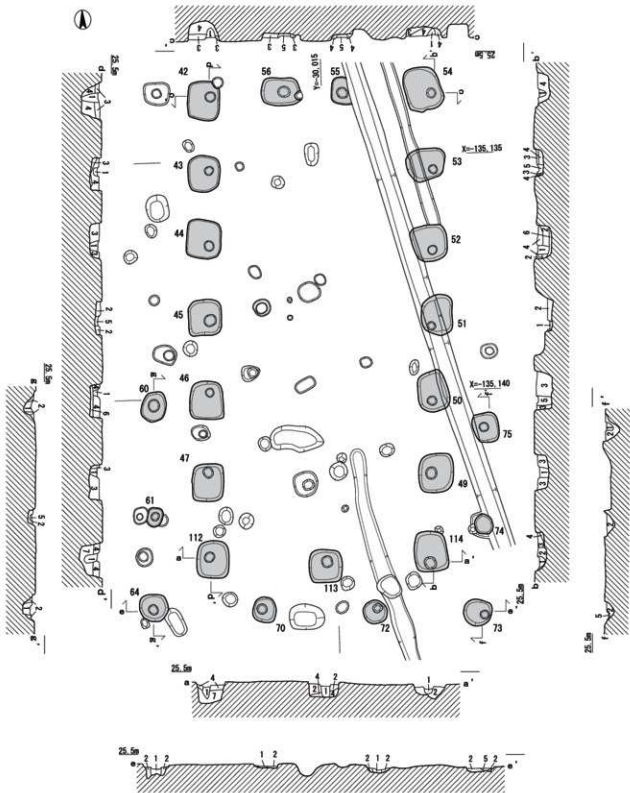
- 1 黒色 7.5YR2/1 中砂混じり細砂
- 2 灰黄褐色 10YR5/2 中砂
- 3 黒色 7.5YR2/1 中砂混じり細砂(炭層)
- 4 灰黄褐色 10YR5/2 中砂

図11 竪穴住居 2 平面・断面図



- 1 黒褐色 10YR3/2 粗砂・中砂混じり粘質細砂
- 2 黒褐色 7.5YR3/2 中砂混じり粘質細砂
- 3 黒褐色 10YR3/2 粗砂・細砂混じり中砂
- 4 褐色 7.5YR4/4 中砂混じり粘質細砂
- 5 褐色 7.5YR4/4 砂混じり粘質細砂
- 6 褐色 10YR4/4 粗砂・細砂混じり中砂
- 7 褐色 10YR4/4 粗砂・細砂混じり粘質細砂
- 8 黒褐色 10YR3/2 中砂混じり粘質細砂

図12 掘立柱建物 1 平面・断面図



- | | |
|---|---|
| 1 黒褐色 10YR2/3 細砂・中砂混じり粘質細砂 | 5 黒褐色 10YR2/3 細砂・中砂混じり粘質細砂に
灰質褐色 10YR4/2 粘質細砂を含む |
| 2 黒褐色 10YR2/3 細砂・中砂混じり粘質細砂に
褐色 10YR4/4 細砂混じり中砂ブロック含む | 6 にぶい黄褐色 10YR4/3 中砂混じり粘質細砂 |
| 3 暗褐色 10YR3/3 細砂・極細砂混じり細砂 | 7 黒褐色 10YR3/2 細砂混じり細砂 |
| 4 暗褐色 10YR3/3 細砂・極細砂混じり細砂に
黄褐色 10YR5/6 細砂・極細砂混じり細砂ブロック含む | |

図13 掘立柱建物2平面・断面図

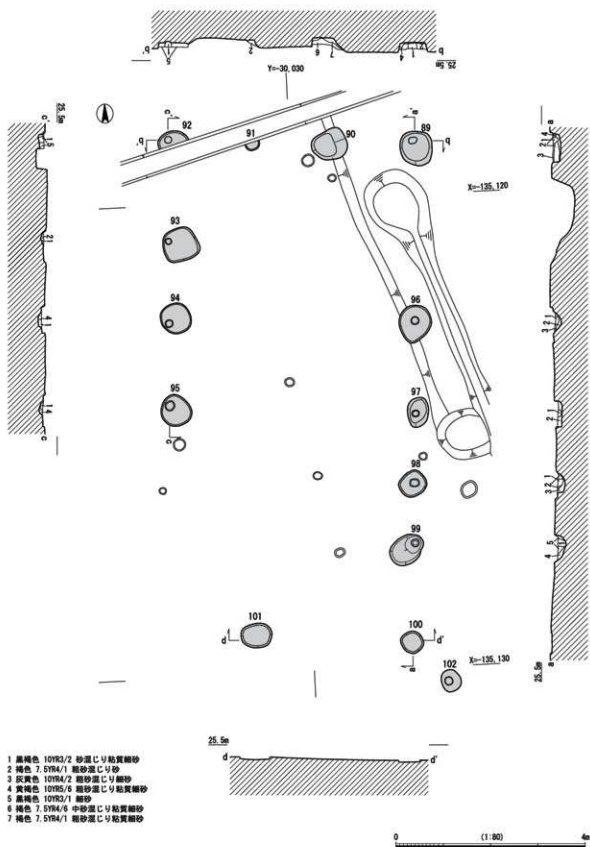
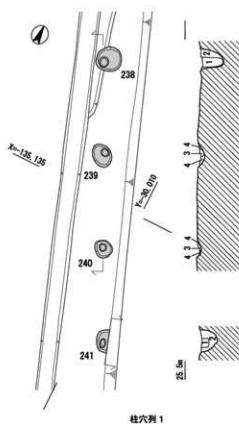
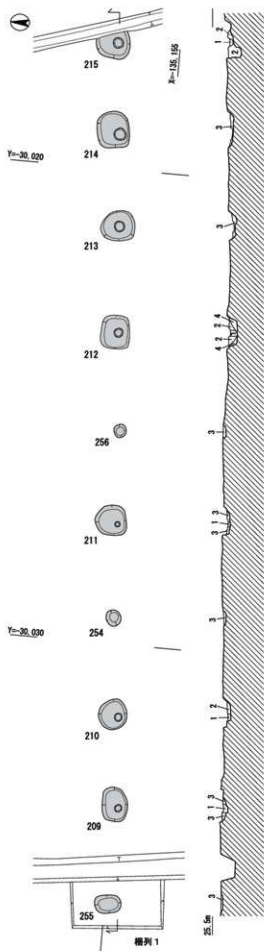


図14 掘立柱建物3平面・断面図



柱穴列 1

- 1 黒褐色 7.5YR5/2 粗砂混じり中砂
- 2 褐色 7.5YR4/4 粗砂混じり中砂
- 3 灰黄褐色 10YR4/4 粗砂混じり中砂
- 4 にぶい黄褐色 10YR4/3 粗砂混じり中砂

0 (1:30) 4m

- 1 灰黄褐色 10YR5/2 中砂混じり粘質細砂
- 2 暗褐色 10YR3/3 中砂
- 3 褐色 10YR4/4 粘質砂・中砂混じり粘質細砂
- 4 にぶい黄褐色 10YR4/3 粘質細砂

図15 構列 1、柱穴列 1 平面・断面図

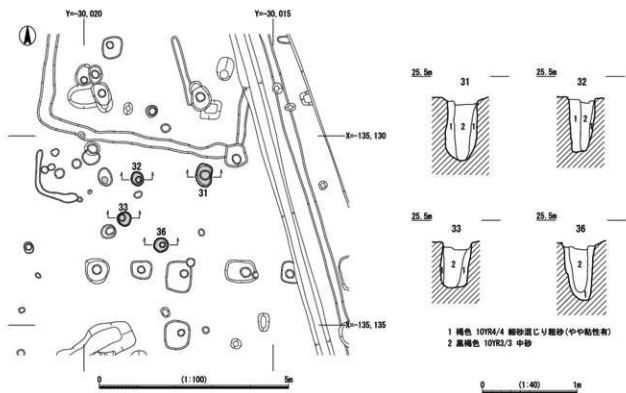
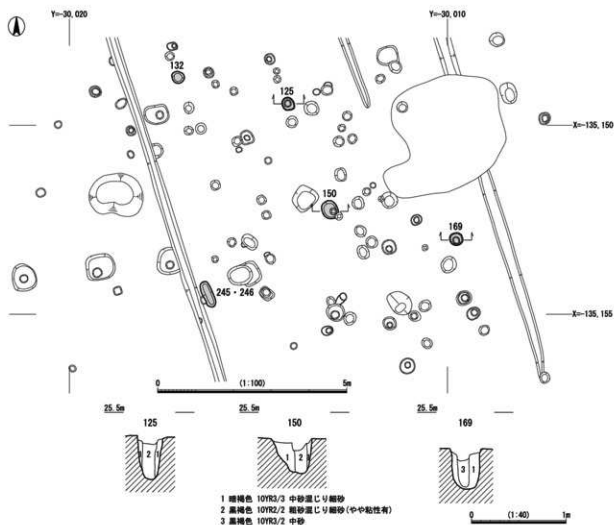


図16 ヒット群平面・断面図

また、調査区内にはこの柱穴の他、根石を持つ柱穴は確認されていない。埋土にはふい黄褐色粘質細砂で、遺物は出土しなかった。

31・32・33・36・125・150・169柱穴(図16、図版7-8、図版8-1・2)

調査区南東部1B2e、1B2fと、竪穴住居1の南側の1B2dで、数多くのピットを検出した。その中には、柱痕跡が確認され、深さが0.5mを超える深いものを確認している。しかし、掘立柱建物としてまとまるものではなく、その性格は判然としない。遺物は土器の細片が少量出土しただけで、時期は特定できない。

第3節 遺物

遺物出土量はコンテナ(60cm×40cm×15cm)にして5箱分である。主な遺物として弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器A類、石器などがあり、それらの大半は小片ないし細片であった。

遺構出土遺物(図17、図18-3~34、図版9・10)

57土坑 3は弥生土器甕の底部である。残存状況が悪く、摩滅しているため調整は不明瞭であるが、形状から第Ⅲ様式から第Ⅳ様式と考えられる。

137土坑 4は弥生土器壺の体部片で波状文と櫛描直線文が繰り返し施されている。5は弥生土器底部片である。4と5は色調、胎土などが同じであり、同一個体と考えられる。第Ⅱ様式に位置づけられる。1・2はサヌカイト製の石器で、1は横長剥片で長さ4.0cm、幅5.0cm、厚さ0.6cm、重さ125gを測り、打面部は自然面で連続して剥離されたものである。2は刃器で長さ7.7cm、幅4.0cm、厚さ0.6cm、重さ25.5gを測る。刃部は側辺と下部にあり、両刃と片刃といった違いがあり、使用目的が違っていたようである。石器の年代も土器と同じく弥生時代中期前半頃と考えられる。

竪穴住居1-2 6は26柱穴出土の土師器長胴甕である。口縁部は大きく外反している。全体に摩滅しており調整は不明瞭であるが、口縁部にはナデ調整が認められる。飛鳥時代に属すると考えられる。

掘立柱建物1 7は掘立柱建物1の9柱穴から出土した須恵器平瓶もしくは鉢で、底部から体部にかけての破片である。体部下には回転ヘラケズリが認められた。形状から飛鳥時代のものと思われる。

191土坑 8は土師器皿である。丸みをもった底部で、体部はやや屈曲しながら外上方へ開く。口縁部は外反せず、端部は丸くおさめる。全体に摩滅しており調整は不明瞭であるが、オサエで成形後、内面ナデ調整を施す。形状から平安京編年Ⅳ期中からⅣ期新に相当する時期(11世紀後半頃)と考えられる。

132ピット 9は土師器碗である。口縁部はやや上方に屈曲し、端部は丸くおさめる。摩滅が著しいため調整は不明である。14は黒色土器A類碗である。やや丸みを帯びた平底に、断面三角形の低い高台を

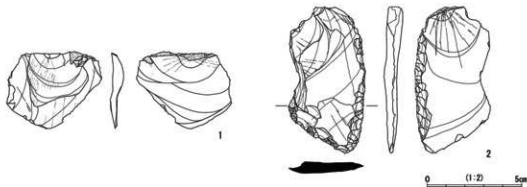


図17 出土遺物実測図(石器)

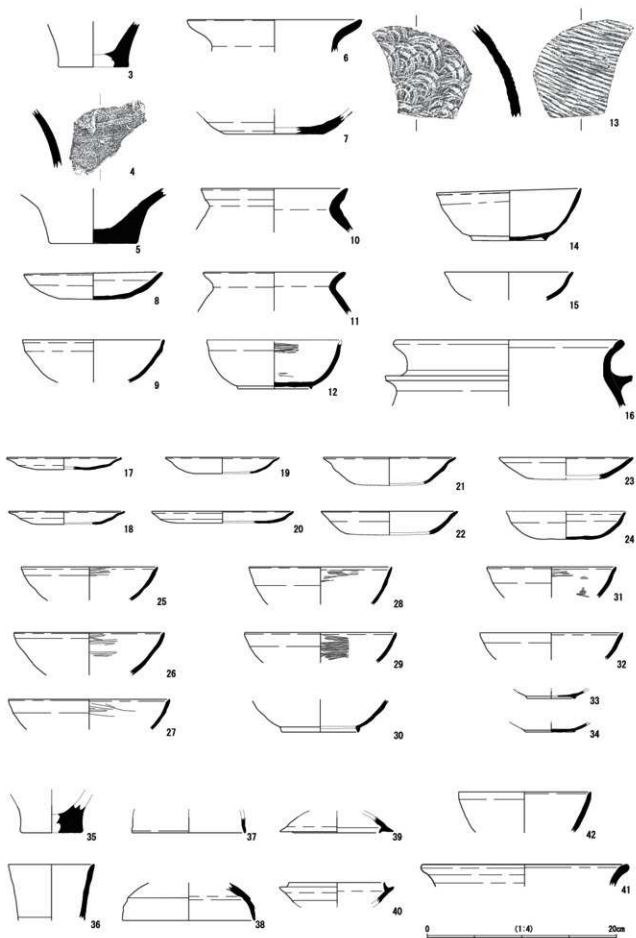


图18 出土遗物实测图 (土器)

貼り付けている。体部は若干屈曲しながら緩やかに外上方へ開き、口縁端部は丸くおさめる。全体に摩滅しており調整は不明である。平安京編年Ⅱ期新に相当する時期（9世紀末から10世紀初頭）と考えられる。

235ビット 10は土師器甕である。頸部から口縁部にかけては厚手に作られ、口縁外側に平坦な面を形成する。摩滅が著しく調整は不明である。9世紀後半から10世紀代に位置づけられる。

223ビット 11は土師器甕である。口縁部は強く外反し、端部は丸くおさめる。全体的に薄手に作られている。摩滅が著しく調整は不明瞭である。9世紀代に属すると考えられる。

48ビット 12は黒色土器A類椀で、底部は平底で断面三角形の低い高台を貼り付けている。体部は内湾しながらやや外上方へ開く。内外面とも摩滅が著しいが、内面にわずかにヘラミガキが認められる。平安京編年Ⅱ期新に相当する時期と考えられる。

130ビット 13は須恵器甕の体部で、焼成は硬質で外面に平行タキが施されている。

87ビット 15は黒色土器A類椀である。口縁部はやや外反する。残存状況が悪く、摩滅も著しいため調整は不明瞭である。10世紀前半頃に位置づけられよう。

231ビット 16は土師器羽釜で、口縁端部は内側に折り返す。胎土は粗く、細礫を多く含んでいる。平安時代後期頃のものと考えられる。

86ビット 17～20は土師器皿、21～24は土師器椀である。土師器皿は平坦な底部に口縁部が屈曲して立ち上がり、口縁端部の内側は肥厚する。21は体部が緩やかに外上方へ開き、口縁部は屈曲し端部は内側に肥厚する。22は体部が緩やかに上方に開く。口縁部はやや外反し端部の肥厚は認められない。23は体部が緩やかに上方に開く。口縁部は外反せず、端部はやや内側に肥厚する。24はやや丸みを帯びた平底に体部は若干屈曲しながら外上方へ開く。これらの土師器はいずれも摩滅が著しく調整は不明瞭であるが、すべての個体で内面にナデ調整が行われ、外面はオサエで成形した後にナデ調整が認められる。

25～34は黒色土器A類椀である。25～29、31・32は体部が外上方へ開き口縁は若干外反する。口縁内側には沈線が認められる。30・33・34は底部片で、30は断面三角形の低い高台をもち、33・34はやや丸みを持った平底に断面三角形の低い高台をもつ。いずれも摩滅しているため、調整は不明瞭であったが外面はナデ調整を施し、25～29、31では内面にヘラミガキがわずかに認められた。暗文は確認できなかった。

土師器皿の口縁部の形態や法量、黒色土器の様相より平安京編年Ⅱ期新に位置づけられる。

包含層出土遺物（図18-35～42、図版9）

35～42は第6層・第7層・第26層からの遺物である。35は弥生土器甕の底部である。残存状況が悪いが、形態から第Ⅲ様式から第Ⅳ様式に位置づけられる。36～41は須恵器である。36は長頸壺で頸部には1条の沈線がめぐり、口縁部は少し外方に広がる。焼成は硬質である。37～39は杯蓋で、37は口縁部がほぼ垂直に下がり、端部は丸く仕上げる。焼成は硬質である。38は稜の痕跡を残し、口縁端部は丸く仕上げる。焼成は軟質である。39は口縁部が外下方に下り、端部は鋭く仕上げる。かえり端部は口縁端部を結んだラインよりも下方に下がる。焼成は硬質である。40は杯身で、たちあがりは短く内傾し、受部は外上方にのびる。焼成は硬質であった。41は広口壺で、口縁部は大きく外反し、端部は丸く肥厚する。焼成は硬質である。38は6世紀中葉から後半に位置づけられ、36・37・39～41は飛鳥ⅠからⅡに属する。42は黒色土器A類椀で、口縁部は外反せず口縁端部内側には沈線がめぐり、平安京編年Ⅱ期新に相当するものである。

表1 土器観察表

番号	地区	遺構		層位	備考	種類	器種	法量		色調	特徴
		番号	種類					口径	器高		
3	1B2d	57	土坑	竪穴住居 1-2 竪立柱建物 1	弥生土器	甕	[4.5]	2.5Y7/2灰黄	底径(7.6)		
4	1B1f	137	土坑		弥生土器	壺		7.5Y R6/6橙	底径(9.0)		
5	1B1f	137	土坑		弥生土器	壺	[5.8]	7.5Y R6/6橙			
6	1B2c	26	柱穴		土師器	長胴甕	(18.4)	[3.4]	10YR7/4にぶい黄橙	底径(10.0)	
7	1B2c	9	柱穴		須恵器	平瓶or鉢	[2.0]	2.5YR/3淡黄			
8	1B1f	191	土坑		土師器	皿	(14.6)	[2.9]	10YR7/4にぶい黄橙		
9	1B2e	132	ピット		土師器	碗	(15.0)	[4.5]	7.5Y R6/6橙	高台径(7.8)	
10	1B2e	235	ピット		土師器	甕	(15.6)	[4.3]	7.5YR6/4にぶい橙		
11	1B2e	223	ピット		土師器	甕	(15.2)	[4.2]	7.5YR6/4にぶい橙	高台径(7.4)	
12	1B2e	48	ピット		黒色土器	碗	(14.0)	[4.8]	10YR8/1灰白		
13	1B2e	130	ピット		須恵器	甕			N2/黒	高台径7.4	
14	1B2e	132	ピット		黒色土器	碗	15.0	5.3	7.5YR6/6橙		
15	1B2d	87	ピット		黒色土器	碗	(13.6)	[3.0]	7.5Y R6/6橙	高台径(8.0)	
16	1B2e	231	ピット		土師器	羽釜	(23.8)	[6.9]	7.5YR7/4にぶい橙		
17	1B2d	86	ピット		土師器	皿	(12.2)	[1.3]	10YR7/4にぶい黄橙	高台径(8.0)	
18	1B2d	86	ピット		土師器	皿	(12.0)	[1.4]	10YR7/4にぶい黄橙		
19	1B2d	86	ピット		土師器	皿	(12.1)	[1.7]	10YR7/4にぶい黄橙	高台径(5.0)	
20	1B2d	86	ピット		土師器	皿	(15.1)	[1.2]	10YR7/4にぶい黄橙		
21	1B2d	86	ピット		土師器	碗	(14.0)	[2.8]	10YR6/4にぶい黄橙	高台径6.6	
22	1B2d	86	ピット		土師器	碗	(14.4)	[2.4]	10YR6/4にぶい黄橙		
23	1B2d	86	ピット		土師器	碗	(14.2)	[2.3]	10YR6/4にぶい黄橙	高台径(6.2)	
24	1B2d	86	ピット		土師器	碗	(12.6)	[2.8]	10YR6/6明黄褐		
25	1B2d	86	ピット		黒色土器	碗	(14.4)	[3.6]	10YR7/4にぶい黄橙	高台径(5.0)	
26	1B2d	86	ピット		黒色土器	碗	(15.8)	[4.5]	10YR6/6明黄褐		
27	1B2d	86	ピット		黒色土器	碗	(17.0)	[3.3]	10YR5/4にぶい黄褐	高台径(8.0)	
28	1B2d	86	ピット		黒色土器	碗	(15.0)	[4.0]	7.5YR6/6橙		
29	1B2d	86	ピット		黒色土器	碗	(16.0)	[3.2]	10YR6/4にぶい黄褐	高台径(6.6)	
30	1B2d	86	ピット		黒色土器	碗		[3.3]	10YR5/4にぶい黄褐		
31	1B2d	86	ピット		黒色土器	碗	(13.6)	[3.3]	10YR6/6明黄褐	高台径(5.0)	
32	1B2d	86	ピット		黒色土器	碗	(15.2)	[2.9]	10YR6/4にぶい黄褐		
33	1B2d	86	ピット		黒色土器	碗		[0.8]	10YR6/6明黄褐	高台径6.6	
34	1B2d	86	ピット		黒色土器	碗		[1.2]	10YR7/6明黄褐		
35	1B3c		第24層		弥生土器	甕	[2.7]	7.5YR7/3にぶい橙	底径(6.2)		
36	1B3c		第24層	須恵器	長頸壺	(9.0)	[5.9]	N6/灰	高台径(5.0)		
37	1B3c		第24層	須恵器	杯蓋	(12.0)	[1.6]	N5/灰			
38	1B4c		第24層	須恵器	杯蓋	(13.8)	[4.0]	10YR6/4にぶい黄橙	高台径(5.0)		
39	1B3c		第24層	須恵器	杯蓋	(12.0)	[1.7]	N6/灰			
40	1B2c		第6層	須恵器	杯身	(10.0)	[2.2]	5Y6/1灰	高台径(5.0)		
41	1B2c		第6層	須恵器	広口壺	(21.6)	[2.3]	10B6/1青灰			
42	1B1f		第7層	黒色土器	碗	(14.0)	[4.3]	10YR8/2灰白			

* ()は復元値 []は残存値

第4章 自然科学分析

第1節 地山及び風倒木痕の検討

1. はじめに

遺構面として認識した第16層については、人為的に動かされた整地上である可能性も考えられることから、下層確認トレンチを設定し掘り下げたが、遺物の包含は確認できなかった。また、その下層の第17層を削って整地しているとする事も目視で判断することは困難と考えられることから、可能な限り土壌の性質についての検証を試みた。比較のために当調査区の他に、上の山遺跡03-1調査地内（土壌サンプル採取B地点、C地点）で採取した地山の土壌サンプルとの比較を行った。

当調査区で土壌サンプルを採取した層位は（土壌サンプル採取A地点）、調査区東壁断面で無数に確認した地割れを充填した土壌と風倒木痕の埋土、地山である第17層などである。

2. 土壌分析の手法と結果

a. 分析手法

分析に用いた土壌サンプルは図19・20に示すように、地割れ部分から土色の異なる2点と風倒木痕の埋土から3点、整地土の可能性の指摘された層位の下部にあたる第17層1点である。それより上部の土壌は風倒木痕のサンプル2（風倒木2）と同じものなので敢えて採取しなかった。地割れ部のものは任意に40～50g、後者は50gを秤量して用いた。これらの土壌の性質については、土壌サンプル採取B地点とC地点で採取した土壌とも比較して述べる。

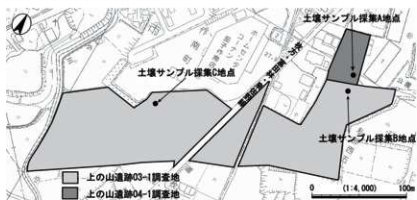


図19 土壌サンプル採取地点位置図

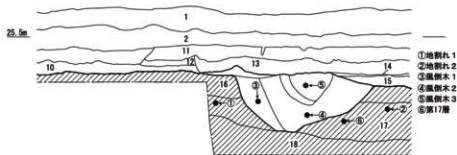


図20 土壌サンプル採取A地点断面図

採取した土壌サンプルは、①採取時点の湿潤状態での重量を秤量した後、自然乾燥した状態での重量を秤量することで、重量の減少分をサンプルの含水比として百分率で示す。②乾燥土壌は水中で攪拌して砂粒分と粘土分とに分離し、砂粒分は粒度分析、粘土分は微化石（花粉・珪藻・植物珪酸体等）分析に用いたが、微化石は認められなかった。

粒度分析 ①水中で攪拌した土壌を、紙フィルターで砂粒と粘土からシルトとに簡い分けした。紙フィルターを通過した粘土・シルトはワンニングで沈殿したシルト（F>で表記）を採取し、粘土分は花粉・珪藻等の分析サンプルとして一部を残して廃棄した。②粘土・シルトを除いた砂粒は、メッシュ5 [4mm] (0.5<で表記)。メッシュ10 [1.68mm] (1.68<で表記)。メッシュ20 [0.84mm] (0.84<で表記)の篩で選別し、メッシュ20を通過したものについては乾燥した紙フィルター（0.84>で表記）を用いて簡い分けした。この時点でフィルターを通過したものは細砂レベル（F>で表記）のものである。③選別された資料の総量を秤量して、洗い流された粘土分の含有量を求める。簡い分けした砂粒についてはそれぞれに重量を測り比率を求めた。

b. 分析結果

土壌成分と粒度でみると、地割れ1・2と第17層、風倒木痕埋土の風倒木1・3が同じような傾向としてグループ分けできるが、風倒木2は他と異なって粘土含有量が多く、砂粒が少なくなるという顕著な傾向が見られ、水分の含有量も他と比べると若干高いようである。

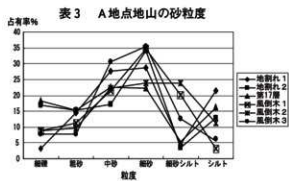
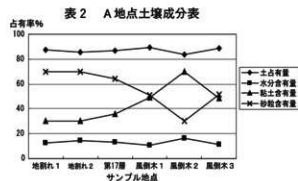
他の資料では粘土が少なく、砂粒が多くなる傾向にあって、風倒木痕1・3では粘土・砂粒ともに比率はほぼ同量となる現象がみられる。地割れの土壌については、地山面に起きた地割れに雨水などによって運ばれた粘土分と砂粒分が充填されていることになるので、粘土・砂粒ともにその時点での地表面にあった土壌に起源しているといえる。

風倒木痕埋土については、地山内に根を張った樹木が強風雨で揺さぶられるうちに、雨水の浸透に従って粘土分が下層に凝集されるような現象が起きたのではないだろうか。その結果として、この粘土分と水分を多く含んだ土層が滑り面となって倒木したのではないかと考えられる。

風倒木痕埋土の粒度分析でも風倒木1・3は中砂から細砂にかけてピークができ、シルトが急激に減少することがわかる。一方の風倒木2は中砂から細砂シルトまで同じレベルにあってシルトで減少するが、全体の傾向としては、地山や地割れのサンプルと似た傾向を示すものといえる。

問題となるのは、遺構面のベース土（第16層）が、B地点のベース土とC地点の石器を包含していた土壌と類似している関係についてである。

B地点では地山面の確認のためにグリッドを設定して土層の観察を行い、土壌サンプルとして遺構面である上層（B地点-1）・中層（B地点-2）・下層（B地点-3）の3点を採取している。C地点



の土壌と粒度を比較した結果を表4・5に示した。

B地点での粒度の出現率でみると、下層のB地点-3が粗砂からシルトへと一貫して減少する点で上層・中層との違いがあり、上層・中層では中砂から細砂にピークが見られる傾向がみられる。遺構面のベース土である上層のB地点-1は、風倒木埋土の検討で風倒木3とした土壌がこれに相当するとしたことを裏付ける結果を示している。また、第17層とした土壌が中層のB地点-2と同じような変化をたどることから同一層ということが出来る。

C地点の土壌との比較では、細礫から粗砂の出現率が低く、細砂で飛び抜けて増加をみせるのがC地点の土壌の特徴といえる。このように遺構面のベース土は見た目には同様に見えても異なる性質のものであることがいえる。しかし、全体としてグラフにみる出現率の形状は大体同じような変化を示すので、堆積過程は同じような状況下にあったのだろう。ただ、下層のB地点-3については他と異なった傾向を示しているので堆積環境そのものが違った可能性が考えられる。上層と中層では同じような性質の土壌が、ほぼ同じような堆積環境で形成されたことになるので、遺構面のベース土が人為的な整地土であるとするには否定的にならざるを得ない。

一見して、C地点でみられた赤みを帯びた土壌と当調査区の遺構面のベース土は、堆積環境は同じでも違った性質の土壌とする点についてもう少し詳しくみると、土壌に占める粘土分と砂粒分の比率に顕著な違いがある。C地点では粘土分が60%を占めているのに対して、遺構面のベース土では粘土分が20%、砂粒分が80%といった比率であり、レンジでみると双方で砂粒分と粘土分が逆転した関係にあるといえる。このような違いのである原因については、当調査区とC地点は、丘陵を挟んで東斜面と西斜面といった立地関係にあるので、単にこの立地による違いに起因しているとも問題はないのだが、明らかに違う性質の土壌ではあるが、同じように赤褐色を呈する土壌の起源までが異なるとはいえない。

C地点の土壌には、土壌が赤褐色を呈する原因となったとみられる鉱物が含まれているのに対して、当調査区側においては、殆どその鉱物はみられず、花崗岩に起源する長石・石英粒で構成されている。調査区周辺で赤褐色を帯びた土壌は確認できないが、これが交野市周辺にある大阪層群上面の段丘礫層を覆って存在するとされる赤色の土壌に相当するならば、花崗岩に起源する長石・石英は大阪層群の形成過程の洪積世末に河川堆積物が扇状地を形成して終わる過程でのものと考えられるので、B地点の1～3で50～80%の割合で含まれる花崗岩類に起因した鉱物は、この時期の堆積物を中心として構成されていると考えられ、浸食される過程で土壌を赤く染める原因となった層位を削りながら再堆積した結果が、遺構面を形成するベース土であると考えられる。一方で下層に向けて土色が黄色味を帯びてくることについては、丘陵上の上位にあったものが浸食で丘陵裾に堆積する際は下層に堆積する逆転現象を起こしているのである。

表4 B・C地点地山の砂粒度

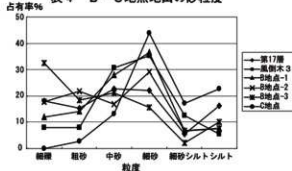
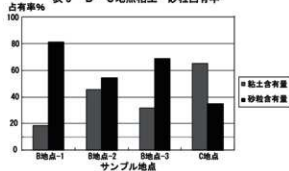


表5 B・C地点粘土・砂粒占有量



3. 結び

遺構面のベース土と風倒木痕埋土の検討を行ってきた。問題提起された遺構面ベース土が人為的に動かされた土壌であるという積極的な根拠を得ることはできなかった。周辺の状況からすると丘陵上にあった堆積物が、自然の浸食作用で丘陵裾に再堆積したものと考えるのが妥当といえよう。さらに、同じ丘陵の西側斜面にあたるC地点で、開析谷を埋めている同様の土壌との比較では、同じ土壌が影響しているといえそうだが、性質の違いや堆積過程の状況に違いのあることを検証してきた。最後に分析の過程で得られた全情報をもとに、因子分析を行った結果を表に示す。

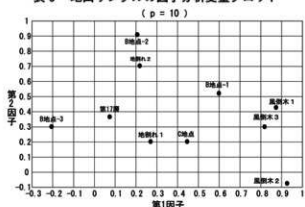
散布状況を見ると第1象限のB地点-3を除きほとんどのものは第4象限に集まり、第3象限は風倒木2だけで、風倒木痕埋土はほぼ一局に集中している。遺構面のベース土と関連付けて考えた風倒木3・B地点-1・C地点も近い位置にあることがわかり、遺構面のベース土である第16層とは明らかに異なった、第17層・B地点-2・B地点-3は別グループとして位置していることがわかる。

最後に、遺構面の形成時期について触れておかなければならないが、時期決定の決め手となる作業はできておらず、上面の歴史時代の堆積層が形成される過程の検討も十分とはいえないところがある。しかし、B地点の最終遺構面とC地点の土壌が同じものかという点については、火山ガラスの有無で検討したことがある。結果は、C地点で石器の出土した層位でATとアカホヤが混在して約5%程含まれていたのに対して、B地点では全く含まれないといった状況がみられた。

当調査地で採取した土壌サンプルに含まれる

火山ガラスの量は、風倒木3（第16層とB地点-1に対応）、第17層（B地点-2に対応）とB地点-3では火山ガラスは含まれておらず、地割れ1・2で約1.5%、風倒木1が最も多く3.4%であった。風倒木1の含有量がC地点でみられる数値に近いものであるが、遺構面より下の層位には全くみられていないので、B地点と同じ状況にあることを示しているといえる。よって第16層以下の堆積層はATの降灰以前に形成されていたと考えるのが妥当ではないかと考える。

表6 地山サンプルの因子分析変量プロット



第2節 第15層の検討

1. はじめに

第16層の上に堆積する第15層は、時期の特定はされていないが耕作土と考えられる土層であるが、明らかに水成堆積層とわかる土層である。その上にある第13・14層は、洪水でもたらされたものなので、それ以前に形成されていた第15層の堆積環境について考えてみた。

サンプルは、第15層の上層と下層で約25gの土壌を採取した。上層のサンプルでは多くの微化石群を検出したが、下層では殆ど見られなかったことから、上層での結果について述べる。

2. 土壌分析の手法と結果

採取した土壌を水中で攪拌し、砂粒分と粘土分に分離して粘土分を分析した。分離した粘土分を3ml取り、自然沈殿の後に取り除いて減少した上澄み分を3mlまで洗浄液（次亜塩素酸ナトリウム、水酸化ナトリウム3%、界面活性剤の混合液）を満たして静置し、攪拌して自然沈殿で上澄みを棄てた後は表面活性剤の泡が立たなくなるまで水洗・自然沈殿を繰り返し、泡立たなくなった時点で沈殿した残渣をスポイドで一滴取り、必要に応じて一時、または永久プレパラートを作成した。

土壌に含まれていた微化石は下の図に示した、珪藻・プラントオパール・花粉などであるが、花粉については、上記の処理方法では不適切なところがあるので記述しない。

珪藻については19種類前後認められるが、完形のもの14%と少ないことから、他所から移動してきたものが大半と考えられる。完形のものについてみると河川や湖沼で普通にみられる流水不定性種が多く、2は好止水性種で沼沢湿地の付着性種として知られ、13は水田などによく出現する代表的な珪藻である。断片の中には陸生種もみられたが、7は流水不定種であるが、水の枯渇した環境下でも生きられる陸生種である。

プラントオパールは、点数は少ないが単細胞珪酸体4種類と機動体珪酸体5種類の9種類がある。20・21、24~26などはイネ属の珪酸体なので、イネが栽培されていた可能性は考えられる。その他に、28はオオムギ族と考えられるが、栽培種であるかについてはわからない。

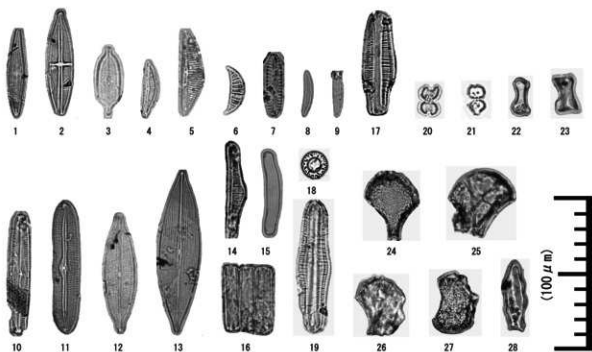


図21 珪藻化石・植物珪酸体写真

1 *Stauroneis anceps* EHRENBERG 2 *Stauroneis phoenicenteton* (NITZSCH) EHRENBERG 3 *Neidium dubium* 4.5 *Amphora ovalis* KÜTZING 6 *Rhopalodia gibba* (EHRENBERG) O.MÜLLER 7 *Pinnularia borealis* EHRENBERG 8 ? 9 *Eunotia veneris* (KÜTZING) O.MÜLLER 10 *Pinnularia rupestris* HANTZSCH 11 *Pinnularia subcapitata* GREGORY 12 *Stauroneis acuta* W.SMITH 13 *Navicula cuspidata* KÜTZING 14・15 *Eunotia arcus* EHRENBERG 16 *Tabellaria fenestrata* (LYNGBYE) KÜTZING 17 *Rhopalodia gibba* (EHRENBERG) O.MÜLLER var. *ventricosa* (EHRENBERG) GRUNOW 18 *Cyclotella meneghiniana* KÜTZING 19 *Rhopalodia gibba* (EHRENBERG) O.MÜLLER 20・21・24-26 イネ属、22コブナグサ属、23・27ネザサ節、28オオムギ族

まとめ

遺構の変遷 検出した遺構は竪穴住居3棟、掘立柱建物3棟、櫛列1条、柱穴列1条、ピット群、土坑などである。これらは重複関係・主軸方向・出土遺物などから、弥生時代中期、古墳時代前期、古墳時代後期から飛鳥時代、平安時代に大きく分けられる。

弥生時代中期の遺構としては57・137土坑があげられるが、不整な楕円形の土坑で性格は判然としない。

古墳時代前期の遺構には竪穴住居2がある。4本柱の主柱と中央に炉跡を検出しており、弥生時代後期を上限とし、古墳時代前期を下限とした一時期に求められるが、東南へ約20m離れた地点(上の山遺跡03-1調査地)で検出された古墳時代前期の竪穴住居と時期的関連が考えられる。

古墳時代後期から飛鳥時代の遺構としては、竪穴住居1-1・1-2、掘立柱建物1~3、櫛列1を検出した。竪穴住居1-2の主柱穴から6世紀末から7世紀前半にかけての土師器甕片が、また掘立柱建物1の柱穴からは7世紀前半の須恵器片が出土している。他の掘立柱建物では時期の特定できる遺物は出土していないが、建物の平面プランと規模、柱穴の平面形・規模・埋土などから飛鳥時代の可能性が考えられる。さらに、建物および櫛列の主軸方向・規模・配置などからすると、以下のような造営時期の関係が推定できる。

竪穴住居1(1-1・1-2) → 掘立柱建物1 → 掘立柱建物2・3、櫛列1

つぎに、平安時代の遺構をみていくと、9世紀末から10世紀前半の86・132ピットと11世紀後半の191土坑があり、2時期に分かれる。ところで、柱穴列1を掘立柱建物の一部とすると、柱穴は飛鳥時代の掘立柱建物群と比べて小さく、円形で、建物主軸方向も異なることから、平安時代以降の建物である可能性が考えられてくる。他に、ピットを数多く検出している。ピット群は、出土遺物が細片に限られて時期は確定できないが、柱痕跡を確認したものもあり、掘立柱建物の柱穴になることも推定される。

掘立柱建物2について 掘立柱建物2は桁行が6間(9.85m)、梁行が北側3間(4.65m)・南側2間(4.70m)と規模が大きい南北棟で、身舎南側の平側と妻側柱筋に平行してめぐる外周柱穴列を配した特徴的な建物である。外周柱穴列の柱配置は身舎柱間中央に対応した位置にあたり、身舎の柱穴より一回り小規模なものである。おそらく建物の南側に部分的、変則的に廂が付随するものと思われる。こうした柱配置を示す類例は、穂谷川右岸の交野台地縁辺に立地した宇山遺跡S B-5¹⁾や、天野川右岸の交野台地縁辺部に位置する星丘遺跡第2号建物跡²⁾にみられる。前者では柱掘方から飛鳥時代に属すると考えられる須恵器片が出土しており³⁾、後者については古墳時代後期と考えられている。先述したように、上の山遺跡の掘立柱建物2の所属時期を飛鳥時代の一時期に求めたが、こうした変則的とも言える柱配置をもつ掘立柱建物は、古墳時代後期から飛鳥時代へ受け継がれたものといえよう。

なお、掘立柱建物2を含む飛鳥時代の掘立柱建物群は、計画的な建物配置をもち、東西方向に続く櫛列を伴ったもので、単なる一般集落の一部でないことがうかがわれる。また、櫛列1から南へ約20mの地点(上の山遺跡03-1調査地)で総柱建物が検出されていることから、同時期の遺構の範囲確認をはじめとして、建物遺構の性格について今後の調査に待つところが大きい。

註1) 西田敏秀 1994「宇山遺跡(第15次調査)」『枚方市文化財年報13』(財)枚方市文化財研究調査会

2) 宇治田和生 1983「星ヶ丘遺跡 第2・3・4・5次調査」『枚方市文化財年報IV』(財)枚方市文化財研究調査会

3) 柱穴出土遺物については、西田敏秀氏にご教示を得た。

報告書抄録

ふりがな	うえのやまいせき 1							
書名	上の山遺跡 1							
副書名	一般国道168号(都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線)道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第137集							
編著者名	三宅正浩・南出俊彦・矢倉嘉人・齋邦典							
編集機関	(財)大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階 ℡072-299-8791							
発行年月日	2005年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえのやまいせき 上の山遺跡	かたのしきさべにしちようめ 交野市私部西5丁目	27230	65	34° 46' 52"	135° 40' 21"	平成16年10月13日～平成17年1月31日	1460㎡	一般国道168号(都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線)道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上の山遺跡	集落	弥生時代中期 古墳時代前期 古墳時代後期～飛鳥 平安	土坑 竪穴住居 竪穴住居・竪立柱建物 権列・柱穴列 土坑・ピット	弥生土器・石器 土師器・須恵器 土師器・須恵器・黒色土器		上の山遺跡では初例となる飛鳥時代の竪立柱建物群を検出した。		
要約	枚方丘陵東端部の低位段丘上において、弥生時代中期の土坑、古墳時代前期と推定される竪穴住居、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居、主軸を揃えた飛鳥時代の竪立柱建物や権列、平安時代の柱穴列、土坑などを検出した。飛鳥時代の竪立柱建物には部分的に竈をもつと考えられる建物が含まれており、権列を伴うことを考え合わせると一般の集落とは考え難い。							

写 真 图 版



1. 調査区全景（垂直写真）



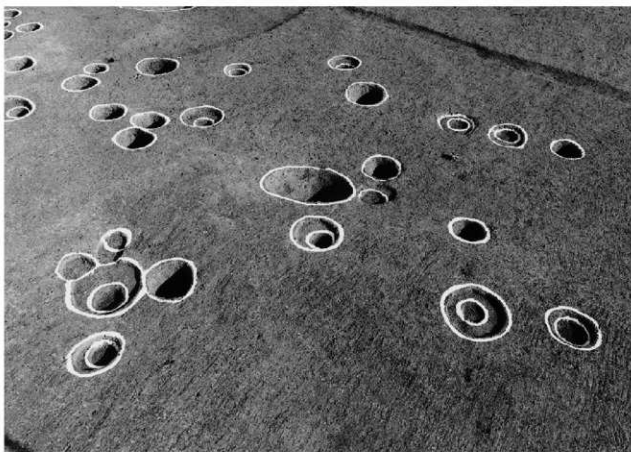
1. 調査区全景（南から）



2. 遺構検出状況（西から）



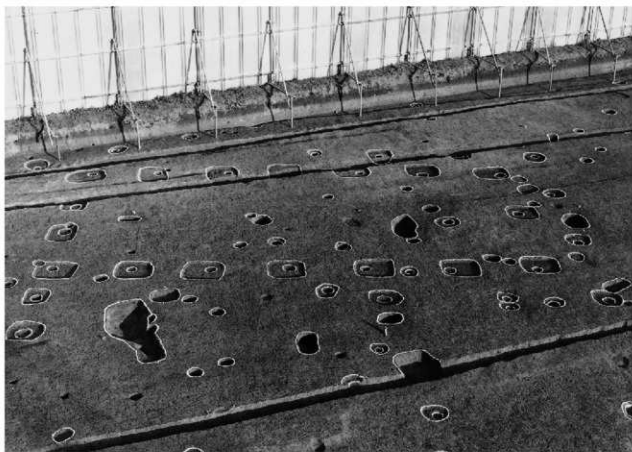
1. 竪穴住居1 (西から)



2. 竪穴住居2 (南西から)



1. 掘立柱建物 2 (北から)



2. 掘立柱建物 2 (西から)



1. 掘立柱建物1 (西から)



2. 掘立柱建物3 (南から)



3. 柵列1 (東から)



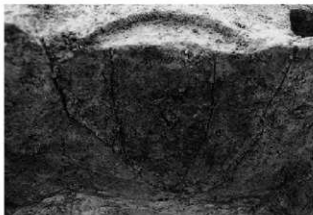
1. 86ピット



2. 132ピット



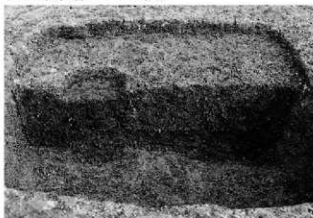
3. 245・246柱穴



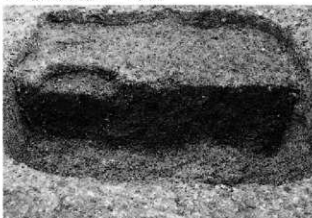
1. 竪穴住居1 - 1 27柱穴



2. 掘立柱建物1 8柱穴



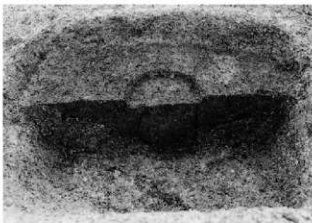
3. 掘立柱建物2 46柱穴



4. 掘立柱建物2 47柱穴



5. 柱穴列1 238柱穴



6. 欄列1 212柱穴



7. 竪穴住居2 168柱穴



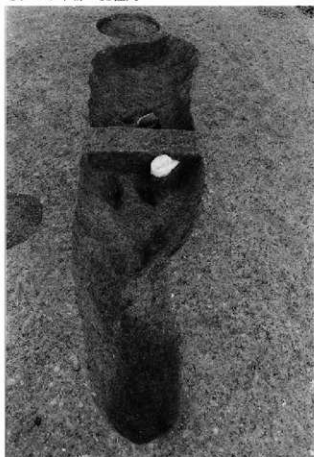
8. ビット群 125柱穴



1. ピット群 31柱穴



2. ピット群 32柱穴



3. 137土坑



4. 137土坑土器出土状況



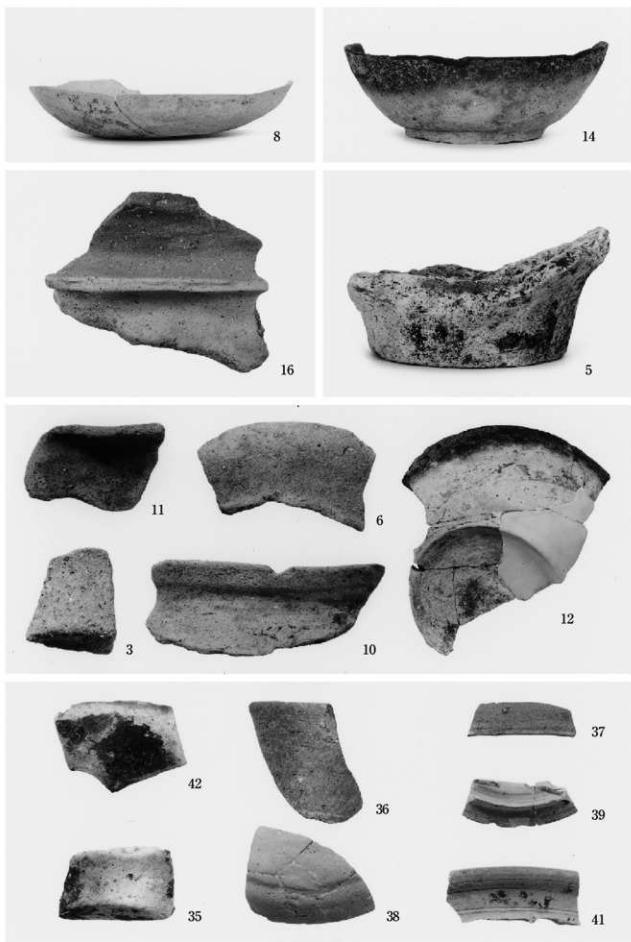
5. 191土坑



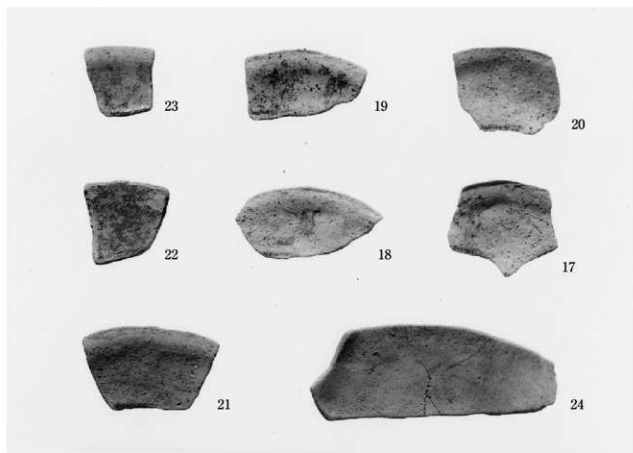
6. 調査区北壁断面



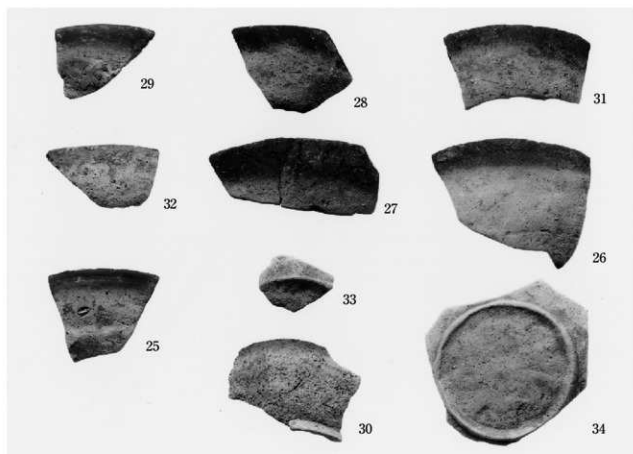
7. 調査区東壁断面



1. 遺構・包含層出土土器



1. 86ピット出土土師器



2. 86ピット出土黒色土器

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第137集

上の山遺跡 I

一般国道168号(都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線)
道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日/2005年12月28日

編集・発行/財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本/株式会社 中島弘文章印刷所
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号